

九代目團十郎の首

高村光太郎

青空文庫

九代目市川團十郎は明治三十六年九月、六十六歳で死んだ。丁度幕末からかけて明治興隆期の文明開化時代を通過し、国運第二の発展期たる日露戦争直前に生を終ったわけである。彼は俳優という職業柄、明治文化の総和をその肉体で示していた。もうあんな顔は無い。之がほんのところである。明治文化という事からいえば、西園寺公の様な方にも同じ事がいえるけれど、肉体を素材とせらるる方でない上に、現代の教養があまねく深くその風ふうに浸潤うしているので、早く世を去って現代の風にあたる事なく終った團十郎よりは複雑である。團十郎はこの点純粹の明治の顔を持っていて、女でいえば洗髪のおつまのような其の世代の標

式といえるのである。五代目菊五郎についても素より団十郎と同じ事が言えるわけであるが、菊五郎の方は余りに多く俳優であり過ぎて、その現われ方がむしろ旧幕の延長として意味があり、当代の文化一般を肉体化していたような趣のある包摂的な団十郎に比べるといささか世代の標式とはなし難い。

私は今、かねての念願を果そうとして団十郎の首を彫刻している。私は少年から青年の頃にかけて団十郎の舞台に入りびたっていた。私の脳裡のうりには夙はやくすでに此の巨人の像が根を生やした様には、大きく場を取ってしまった。此の映像の大塊を昇華せしめるには、どうしても一度之を現実の彫刻に転移しなければならぬ。私は今此の架空の構築に身をうちこんでいるけれど、まだ満足す

るに至らない。私のもまだ駄目だが、世上に幾つかある団十郎像という記念像もみな物になっていない。浅草公園の「暫」はまるで抜け殻のように硬ばって居り、歌舞伎座にある胸像は似ても似つかぬ腑ぬけの他人であり、昭和十一年の文展で見たものは、浅はかな、力み返った、およそ団十郎とは遠い芸術感のものであった。其他演劇博物館にある石膏せっこうの首は幼穉ようちで話にならない。ラグーザの作というのはまだ見ないでいる。団十郎は決して力まない。力まないで大きい。大根といわれた若年に近い頃の写真を見ると間抜けなくらいおっとりしている。その間ぬけさがたちまちはっち澆刺はっちと生きて来て晩年の偉大を成している。一切の秀れた技巧を包蔵している大味である。神経の極度にゆき届いた無神経であ

る。彼の第一の特色はその大きさにある。いかにも国運興隆の大ききである。彼の実際の身の丈は今の吉右衛門よりも小さい。五代目菊五郎と並んだ写真では菊五郎の方がわずかに背が高い。その短軀たंकが舞台をはみ出す程大きいのである。彼は肥つても居ずや瘦せても居なかつた。彼の大ききは素質から来ている。深みから来ている。血統から、荒事師の祖先から来ている。絶体絶命の大ききなのである。

團十郎の顔はほかりと大きい。その道具立の一つ一つがゆつたり出来ていて、此は隈取くまどられるために生みつけられた特別製の素材であつた。其上に舞台上の修練によるあらゆる顔面筋の自由な発達があつた。すべてが分厚で、生きていて、円融無礙えんゆうむげであつた。

団十郎の顔は全体には面長である。横から見ると、後頭よりも
 顔面の方が勝っている。正面から見るとやや鉢開きの形をしてい
 て頬が何処までも長く、滝のようにつづいている。前額の高いの
 を除いてはこれといって目立つ急な突起は無い。顴かんこつ骨も出てい
 ない。下顎したあごにも癖がない。その幅のある瓜実顔うりぎねがおの両側に大き
 な耳朶みみたぶが少し位置高く開いている。おだやかな眉弓の下にある
 両眼は、所謂いわゆる「目玉の成田屋」ときく通り、驚くべき活殺自在
 の運動を有つた二重瞼ふたえまぶたの巨眼であつて、両眼は離れずにむしろ
 近寄っている。眼輪がんりん匝筋そうきんは豊かに肥え、上眼瞼うわまぶたは美しく盛
 り上つて眼瞼軟骨の発達を思わせる。眼瞼の遊離縁も分厚く、内な
 眥いしがいし外眥がいしの釣合は上りもせず下りも為ない。そして涙湖、涙阜るいふが異

様な魅力を以て光っている。下眼瞼の下に厚い脂肪層が一度陰影を作り、それから直ぐ鼻翼の上の強いアクサンとなる。此の目玉に隈くまを入れて舞台で彼が見得を切る時、らんらんと言おうかえんえんと言おうか、又城外の由良之助のように奥深くじつと見つめる時、それは世紀の奥を貫く眼だ。鼻梁びりようは太く長いが、別に高くない。高過ぎて下品になる鼻ではない。むしろなだらかで地道である。顴骨から鼻の両側に流れる微妙な肉、そして更に下顎に及ぶ間延びのした大顴骨筋と咬筋とそれを被おおう脂肪と、その間を縫うこまやかな深層筋の動きとは彼の顔に幽遠の気を与え、渋味を与え、或時は凄せい愴そう直視し難いものを与える。團十郎は鼻下長である。彼の長い鼻下と大きな口裂と厚い唇とはあらゆる舞台

面上工作の根拠地である。彼の口辺の筋肉の変化と強い頤唇溝の語るところは筆で書けない。此所は造型上でも一番手こずる難所である。とにかく清正の髯ひげは此所に楽に生え、長兵衛の決意は此所でぐつときまり、鷺さぎむすめ娘の超現実性も此所からほのぼのと立ちのぼるのである。そしてあのムネ スウリも及ばないめりはりが此所から出るのである。滝壺のようにとどろく声が生れるのである。団十郎の首はまだ出来ない。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集第4巻」小学館

1989（平成元）年4月1日初版第1刷発行

1994（平成5）年9月10日初版第2刷発行

入力：門田裕志

校正：仙酔ゑびす

2006年11月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

九代目団十郎の首

高村光太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>